

人のために豊かさや便利さを提供する
土木を、生活のなかに浸透させていくこと。
「DOBOKU×カルチャー」
では、私たちと土木の距離を縮めてくれる、
そんなコンテンツを紹介します。

第22回 『浮世絵④』

～令和の今、感じる江戸の風景

東京から江戸へ。江戸時代、明治、大正～平成、令和にかけて都内各所には、江戸から変わらない景色を見ることができるスポットがある。中には浮世絵に描かれたままの風景も残っており、まるでタイムスリップしたかのような気分を味わえる。広重、写楽、歌麿が見たであろう景色。今回は、江戸を象徴する「上野」と庶民の遊び場「亀戸天神」に注目しよう。

歌川広重作「名所江戸百景」より「上野清水堂不忍池」。京都の清水寺に倣い、舞台上に建立された清水堂からは不忍池を見ることができる。(所蔵:国立国会図書館)

徳川幕府の象徴と庶民の楽しみが融合した不忍池

江戸時代のイメージというと、江戸城があった皇居周辺エリアが真っ先に思い浮かぶかもしれないが、徳川家代々を祀る菩提寺であり、争いのない平穏な世の中を願った祈禱寺として知られた寛永寺がある上野も江戸時代を語るうえで欠かせない場所だろう。

中でも寛永寺の創建以来、江戸庶民の憩いの場としても発展した不忍池は、浮世絵のみならず、和歌や漢詩など数多くの作品に登場してきた。

不忍池は、もともと、入海だった上野エリアに砂土が堆積していく中でできた自然の産物である。しかし、江戸時代に入り、天海が寛永寺を創建すると、自然にできた池に橋や島など人工的な要素が加わり、多くの人でにぎわう池へと変貌を遂げる。

寛永寺は1625年（寛永2年）、徳川幕府の安泰と万民の平安を祈願するため、慈眼大師天海によって創建。後に4代将軍・家綱の霊廟が造営されると、將軍家の菩提寺も兼ねるようになった。

山号は東叡山（とうえいざん）。つまり、東にある比叡山を意味している。天海は、寛永寺を建立するにあたり、比叡山延暦寺一帯の構図を江戸に移入しようと試みたという。比叡山のふもとにあるのが琵琶湖。そしてそこには竹生島が浮かび、弁財天が祀られている。それに倣うかのように天海は、寛永寺のそばにある不忍池に目をつける。池には以前から島があった



が、新たに中島を築き、弁財天を祀ったといわれている。さらに、京都の権威ある存在といえる清水寺を移入しようと清水観音堂を建立。こうして寛永寺は、格式も規模も国内最大級の大本寺として発展することになる。

不忍池は、桜や蓮の名所としても知られるようになった。花が盛んに咲いている季節になると江戸庶民が詰めかけ多くの見物客でにぎわった。また、蓮の葉に飯を包んで蒸した「蓮飯」も名物として親しまれた。

広重の「名所江戸百景」にも不忍池が幾度となく登場している。「上野清水堂不忍池」には、桜が咲き誇る不忍池が描かれている。左上の中島へ続いていく道には、茶屋が並ぶ。休みの日に江戸庶民が桜を愛でながら茶屋で一息つく。そんな江戸の楽しみが想像できるようだ。今は、樹木が茂っているために清水観音堂から不忍池を拝むことは難しいが、池と桜は、今も変わらず愛でることができる。

江戸庶民にとって憩いの場だった上野も幕末の戊辰戦争では、寛永寺の境内地に彰義隊が



現在の清水堂を下から眺める。春先の桜の季節には江戸時代と変わらない、多くの見物客でにぎわう様子が見られる。

立てこもり戦場と化す。そして、官軍の放った火によって、全山の伽藍の大部分が灰燼に帰してしまう。さらに明治時代になると、政府によって境内地が没収されるなど、壊滅的な打撃を受けてしまう。そして、上野の山は、日本初の西洋式都市公園とし

安・近・短の遊びスポット、 今も愛され続けている亀戸天神

遊園地もゲームセンターもない江戸時代。社会が安定すると江戸庶民は、くらしの合間の骨休みに遊びに出掛けるようになった。春は花見、夏は花火、秋には紅葉狩りなど季節を愛でることが江戸庶民の何よりの楽しみだった。また、寺社参拝とセットにしたり、七福神めぐりをしたり縁起を担ぐ風習もあった。四季を通じて楽しみを見つける近場のスポット。いわゆる“安・近・短”のスポットの一つが亀戸だった。

家康が入府したころは、ほとんどが海か葦の茂った低湿地だった江東区。その中で亀戸付近は土地があり、江戸時代になると庶民の行楽地として大いににぎわったエリアである。

古くは九州太宰府天満宮に対して東の宰府として「東宰府天満宮」、あるいは「亀戸宰府天満宮」と称されていた亀戸天神。その大宰府に倣い設けられたのが心字池、太鼓橋である。この池には、藤棚があり、藤の花が咲くころには多くの見物客でにぎわった。池には錦鯉が泳ぎ、亀が時折顔を出す。半円の形をした太鼓橋が水面に映ることで丸い円ができる。そんな美しい風景を絵師たちが見逃すはずがない。広重の「名所江戸百景」の「亀戸天神境内」には、太鼓橋に満開の藤の花、そしてその景色を楽しむ人たちの姿が描かれている。日本ならではの美しい風景だが、印象派の画家・モネに影響を与えるなど世界でも評された作品だ。明治に入ると正岡子規が「反橋や ふじむらさきに こい赤し」と詠むなどその美しさはどの時代にも受け入れられた。木製だった太鼓橋

は、太平洋戦争で焼失してしまい、現在は1952年につくられた鉄筋コンクリート製だが、その美しい風景は変わらず、今の時代に受け継がれている。

自然に生まれた池でも、人々が手を加えることで観光名所になり、多く



戦火により橋は木製から鉄筋コンクリート造へと変わったが、藤棚と水面に映える半円形のアーチが織りなす景色は江戸から変わらずそのままだ。

での機能が加わり、内国勸業博覧会が開かれたり、博物館や学校が建てられたりするなど、まるで徳川のカラーを一新するかのように西洋の文化が次々と入ってくる。それでも不忍池は、埋め立てられることなく、人々の心を癒し続けて今に至っている。



『亀戸天神境内』で描かれた心字池と太鼓橋。美しいアーチを描く木製の太鼓橋と満開の藤の花に、江戸庶民の「娯楽」を感じ取ることができる。(所蔵:国立国会図書館)

の人の心を動かす。そして、しっかりとメンテナンスを施すことで、江戸の人たちが愛でていた風景を今につなげることができる。江戸のバトンを現在へ渡す。それは、土木の力があるからこそ叶う夢物語である。

〔参考文献〕浦井正明「『上野』時空遊行一歴史をひもとき、「いま」を楽しむ」プレジデント社 2002年、鈴木健一「不忍池ものがたり-江戸から東京へ」岩波書店 2018年、豊島寛彰「上野公園とその付近(上巻)」芳洲書院 1962年、江東区教育委員会「おはなし江東区 川と橋の話」1992年、CG日本史シリーズ⑦「江戸の遊び」双葉社スーパーブック 2008年、細田隆善「東京史跡ガイド⑧ 江東区史跡散歩」学生社 1992年、江東区政策経営部広報広聴課「江東区のあゆみ 江戸から平成」1983年